

## 弥生時代（紀元前 300 年～西暦 300 年）

弥生時代（紀元前 300 年～西暦 300 年）は、狩猟採集社会から定住農耕社会への移行が顕著です。後期の縄文人は農業を営んでいたと考えられていますが、稲作は弥生人の本領だったようです。弥生時代の遺跡には、古代の田んぼの名残が含まれていることが多いです。初期の弥生人は縄文人と同じ種類の石器と共に、金属製のものを含むより精巧な道具を使用していました。金属加工の到来は弥生時代のもう一つの特徴です。

### コンチネンタルコネクション

初期の説では、弥生人は海外からやって来て縄文人に取って代わったとされてきました。限られた DNA 証拠に基づく現在の考えでは、弥生人は縄文人とアジアの他の地域からの移民、おそらく現代の中国の雲南省までの移民が混在しているというものです。新たな移住者は、稲作や金属加工のノウハウを列島にもたらしたと考えられています。弥生人は、一般的に現代日本人の祖先として受け入れられています。

日本の鉄や青銅の仕事は弥生時代に始まり、鉄や青銅の武器、青銅の鈴や鏡、硬貨、鉄や他の金属を先端に付けた農具などを生産していました。

弥生人は縄文土器の伝統を受け継いでいましたが、鍋の装飾はそれほど精巧ではありませんでした。器の形状も、変化するニーズを満たすために時間とともに進化しました。縄文・弥生時代の土器を年代順に並べた 1 つの展示ケースには、2 つの時代の土器の変遷が展示されています。

展示された弥生遺物の多くは、1980 年代初頭、藤岡市立小野中学校の建設中に発見された沖 II と呼ばれる場所から発掘されたものです。発掘調査は、弥生時代初期から中期にかけての東日本最大の遺跡の 1 つであり、27 の埋葬地が発見されたため、考古学者は、遺体が埋葬され、後に解体、処理され、再埋葬されたこの時代の葬儀について詳しく知ることができました。

弥生の住居は縄文時代の先例の高度なバージョンでした。両方の時代、そして古墳時代（およそ 250-552）にさえ、一戸建ての竪穴住居が一般的でした。家には中央に暖炉があり、4 本の等間隔の柱が床に埋め込まれていて、その上にフレームと茅葺きが敷かれていました。博物館内の切り取られた縮尺模型は、住居がどのようなものであったかを示しています。

この時代の他の構造物には、高床式の上に建てられた共同の穀物倉（おそらく害獣を防ぐため）と高い望楼があります。

博物館の図表は、弥生時代の初期、中期、後期における陶器、竪穴住居の配置、埋葬様式の進化を示しています。遺物は年代順に並べられています。

弥生人の農耕習慣から判断すると、弥生人はそれ以前の人々よりも定住環境が整っていたように見えます。このことが、統治機構や集団防衛などの社会的発展につながったと考えられます。